帰り道

完全なよそ者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰り道

【Ｎコード】

Ｎ５４３５Ｌ

【作者名】

完全なよそ者

【あらすじ】

あらすじはありません

「雨やまないね」
隣で歩いていた奈々がそう言った。
「そうだねー」
わたしはビニール傘ごしに空を見上げながら言った。
私と奈々は同じ高校に通っており、今は下校の途中である。昨日から降りつづける雨は、ぱらぱらとだが今も降り続けていた。
わたしは奈々に視線を移した。幼馴染でもある彼女はかなりの美人さんである。長いストレートの黒髪に細い眉毛に大きな瞳、すっと伸びた鼻の下には小さくほんのり赤い唇がついている。
今は傘からそっと手を出し雨を確認するような仕草をしていた。
私の視線に気づいたのか、こちらを向いて困ったものだねといった感じで微笑んだ。
「雨は困るね」
奈々は表情と同じ内容の言葉をだした。
「そうだね」
わたしはそっと同意した。
足元を見るといたるところに水溜りがあり、道を歩きにくくさせていた。
私達はお互いの家につながる住宅街の道を歩いていた。
この道は物心がついた頃から知っており、見慣れた風景である。
奈々とこうして隣に並んで歩くのも何年目になるのだろう。小学生から続けていて、今は高校２年だから１０年はしていることになる。
そう考えるとちょっと凄いと感じた。
わたしがそんな感慨にふけりながら歩いていたためか、奈々も特に話し掛けてくることもなしに、無言で歩みをすすめていた。
ぱらぱらと降る雨が傘にあたる音と、ばしゃばしゃと道を歩く音

だけが強調される。
こういう時間もいいものだなと私がのんびりと考え始めた頃、奈々が突然に鋭い声をあげた。
「危ない！陽子」
「え？」
陽子とはわたしの名前である。奈々の突然の言葉にはっとわれに返ったわたしだが、奈々の言葉の意味を瞬時に理解することはできなかった。
その次の瞬間には強い力で奈々の方に引き寄せられていた。
そしてそのすぐ後に、ダンプカーが水溜りの水を撥ねまわしながら大きな音を立てて通りすぎていった。
私達は道の端を歩いていたので、そのままいても轢かれるということはなかったのだけれども、道の中央寄りにいた私は水をかけられる所だった。
「危なかったね。濡れてない？」
「う、うん。大丈夫」
わたしは突然の出来事にびっくりしており、呆けたような声でいった。
びっくりしたのはダンプカーが通ったことよりも奈々の声と突然引っ張られたことによる所のほうが多いけれど。
「びっくりしたー」
わたしは心の声をそのまま言葉にした。
「ぼけっと歩いているからよ」
奈々はたしなめるように言った。
「うん、ありがとう。おかげで助かった」
わたしは多少、心臓をどきどきとさせたまま礼をいった。
「どういたしまして」
奈々はすました顔をした。
「それより大丈夫だった？濡れてない？」
奈々が心配そうに聞いてきた。わたしは足元からセーラー服まで

を見直した。
「大丈夫」
「そう、それならよかった」
「それにしても奈々って意外と馬鹿力なんだね」
「え？」
わたしの言葉に奈々が意表をつかれたような表情をした。
「いや、わたしを引っ張る時の力、すごかったよ」
「なによそれ」
奈々は少し不機嫌そうに唇をとがらせた。
「ほんと凄かったよ。ダイソーみたいだった」
私はオーバーリアクションぎみに強調した。
「掃除機か！」
奈々が突っ込みをいれる。
「うんうん。今度、私の部屋を掃除してもらおうかな」
私は腕を組んで首を上下に動かした。
「なんで私がそんなことしないといけないのよ」
「だって掃除機かって言ったじゃない」
「それはあなたが言ったことよ」
「そうだっけ？」
「そうよ」
そこで奈々はなぜか目つきを鋭くした。
「もしかして陽子……。またあなたの部屋って前に行った時と同じ状況なんじゃないでしょうね」
「……え？」
私と奈々はよく遊んだりするのだが、大抵は奈々の家で遊ぶか、街で遊ぶかのどちらかである。私の部屋にこない原因はそう、私の部屋は汚いのである。奈々が前にきたのは半年前のことで、その時は風邪をひいた私のためにプリントをもってきてくれたのである。奈々は、ほぼ全ての敷地が物置場所と化している私の部屋を片付けてくれたのだ。文句を言いながらだったけど……。

「そうね、どうだったかしら」
私は知らないふりをした。当然、知らないわけはない。いつもいる場所なのだから。
ちなみに奈々が片付けてくれた三日後には、見事に元の物置部屋に戻っていたし、今もそのままである。
「陽子が掃除機になるべきなんじゃない？」
「ダイソーになれっていうの？」
「別にダイソーじゃないくていいわよ。おばさんなにも言わないの？」
奈々が呆れた顔をした。
「うちは放任主義だから大丈夫」
我が家の家訓は、できることは各自でやれがモットーなのである。よって私の部屋にはだれも入ってこないのである。
わたしが自身たっぷりな態度をとると、奈々はジトっとした目つきでこっちを見た。
「そんな汚いとゴキブリとかでるんじゃない？」
「お化けじゃない限りわたしは大丈夫！」
「じゃあ妖怪きたない部屋お化けがでるよ」
「どんな妖怪なのそれ？」
奈々は考えるように手を顎にあてて目線を下に向けた。そのまま少し考え込んでいる。
五秒程たった後にすっと真剣な表情でわたしに視線を向けた。
「……とりあえず汚いわそいつ」
「そりゃ汚いお化けだしね」
「そうだね」
ふと視線を前に向けると、わたしの家があった。わたしの家は二階建ての一戸建てである。赤の屋根に白の壁、部屋ごとにある窓、どこにでもある住宅そのものである。
「ついたね。じゃあ奈々、また明日ね」
わたしはそう言って玄関に向かった。だけど奈々からの返事はな

かった。変だなと思ったわたしは振り返って見たら、奈々は後ろにぴったりとついてきていた。なぜか笑顔である。
「……どうしたの奈々。奈々の家は向こうだよ」
そう言ってわたしは奈々の家がある方に指をさした。
「知ってるわ」
笑顔のまま奈々が言った。
「え？わたしの家にくるの？なんで？」
わたしはうろたえてる様子を隠せないままである。
「汚いお化けがどんな姿なのかを見たいと思ったの」
「え？まじで？」
奈々は無言で頷いた。わたしは今の部屋の状況を思い出そうとした。
雑誌、プリント、漫画、お菓子のパッケージ、服、なんだかわからない物体、下着、ｅｔｃ……。……とても見せられるものではない。だが奈々は一度、いいだしたら実行せずにはいられない頑固ものでもあることはよく知っている。
「奈々……、五分だけ。後生だから五分だけここで待ってて！」
「わかったわ。いってらっしゃい」
奈々の言葉を聞くとわたしは勢いよく玄関のドアを開けたのだった。
「ただいま！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5435l/

帰り道

2011年1月27日07時57分発行